

宮沢俊義著『あたらしい憲法のはなし 付載七篇』を刊行しております三陸書房の佐藤です。カトリックの司教で新宿区信濃町の真生会館理事長の森一弘さんが、三年前になります。政界での憲法をめぐっての動きに懸念を抱かれ、発言していらつしやいます。その核心のひとつ、今なお周知される必要性を増しつつける、思いがけない角度からの指摘をご紹介します。

……安倍首相などが提唱する憲法改正には、現行憲法の基本となるものまで変えてしまう恐れのある価値観・世界観が潜んでいます。表面上は急激な変化を感じさせるようなものにはなっていないかもしれませんが、しかし、じっくりと読み込んでいくと、国のありようの基本を変えてしまうような価値観・世界観が潜んでいます。その点で、用心が肝要で、冷静に見極めていく必要があります。

わたしがここで、憲法改正には革命につながる側面があるということをあえて強調するのは、今の日本社会では、憲法改正への一連の流れを、対岸の火事のように捉えて、無関心になっている人が多いように思われるからです。

いくつかの世論調査は、人びとの関心がもつばら経済の回復と生活の豊かさに集中し、憲法改正には無関心の人が多い、と伝えております。憲法改正は革命につながる側面があるという観点にたてば、無関心であることはあまりにも人がよすぎるように思えます。というのは、憲法改正が通つてしまえば、当然国のありようが変わります。そのときになって、こんなはずではなかったと気づいても手遅れです。

この点では、現代の日本社会の人びとは、茹で蛙のように思えてならないのです。蛙は変温動物の一種といわれています。周りの温度に体温を合わせていく生物です。そんな蛙を、水を一杯にした釜の中に入れ、徐々に火を加えて温めていっても、蛙は、逃げることもせず、体温を水の温度の上昇に合わせていきます。しかし、釜の水が沸騰した時は手遅れで、みな茹で上がって死んでしまっているといわれます。それと同じように、経済的な豊かさを優先し、それがもたらす心地よさに呑み込まれて、流れのままに日々を過ごしている人びとは、釜の水が沸騰するまでそのままじっとして、最後は釜の中で死んでしまう茹で蛙と同じ道を歩んでしまっているように、わたしには思えてならないのです。茹で蛙のようにならないためにも、わたしたちが生きている社会、国が、どのように変わっていくのか、その動きに鋭いアンテナを張り、真摯に問い続けていくことは、だいじなことにように思えます。

*森一弘著『これからの日本のゆくえ——憲法改正問題を切り口として—— 福音の視点から』(女子パウロ会 二〇一三年二月発行)より

*文中の行アケ、一部文字の太字は発信人によるもの。

(二〇一六・一一・一五)